

ニッチな市場の深掘りで、「レアメタル」を「レア」でないメタルにする技術を手に入れたフルヤ。産業のコメならぬ貴重な素材を今後も最大限生かし、「白金族貴金属の加工分野で世界一を目指す」(古屋社長)。

外山建設

エコで低コスト もみ殻を燃料に

今年の夏、北海道ではこれまで経験したことのない問題が浮上していた。原油価格の歴史的な高騰を受けて灯油の値段も急騰。8月には販売価格が1リットル133.9円と過去最高を記録した。

「このまま冬まで値上がりが続いたら灯油が買えなくなる家庭も出るのではないか」。厳しい寒さをしのぐため、北海道では燃料が不可欠であり、その意味で灯油は道民にとって必要不可欠だ。それでも、現金払いの客にしか灯油を販売しない方針を打ち出す業者もあった。

北海道では家の外に灯油の貯蔵タンクがあり、業者に配達してもらう家庭が一般的だ。1回に100リットル単位で購入するが、年金生活者な

どはツケで支払うケースも少なくない。そのため債権が回収できなくなることを恐れて、「売り渋る」ケースも一部で懸念されていたのだ。

そんな世知辛い動きがある一方、原油価格の高騰を新しいビジネスに結びつけようとする企業もある。

函館市から車で北上すること約4時間。北海道今金町には今年の冬、一風変わった燃料が登場する。もみ殻を細長く焼き固めたブリケット(固形燃料)で、その名も「もみ薪っ子」。製造と販売を担うのは地元の建設業者、外山建設だ。

コストは灯油の4分の1

稲を刈った後に大量に発生するもみ殻に農家は手を焼いていた。手間をかければ「燠炭」と呼ばれる土壌改良剤となるが、ほとんどが焼却処分か農業廃棄物として業者に引き取ってもらっていた。どうせ捨てるのなら何かに使えないか。そこに目をつけたのが外山建設だった。

ゴミを資源に変えるという発想はエコロジーだが、実際はそんな美談でもない。公共事業の削減で外山建設の経営も厳しさを増していた。

93年に起きた北海道南西沖地震の際には復興需要で潤ったが、当時

から比べると現在の売り上げは3分の1以下にまで減っている。「従業員を食べさせていくため、ワラをもつかむ思いで始めた新規事業」と鈴木志宏社長は素直に話す。

もみ殻を燃料に成形する装置は1台500万円。今の外山建設にとって大きな投資だが、原料は近隣の農家からタダで回収できる点は強みだ。1kg当たり35円で販売する計画で、10時間当たりのランニングコストを比べると1000円前後の灯油に比べてもみ殻燃料は4分の1で済む。

もう1つの利点は、もみ殻はバイオマス(生物資源)であるため、二酸化炭素を排出しても温暖化ガスとしてはカウントされないこと。着火性が低いという問題点も抱えるが、低コストで環境にも優しい利点を訴え、初年度からの黒字を目指す。

外山建設は暖房器具などを手がけるアサヒ(札幌市)を通じて装置を購入した。もみ殻をいったんすりつぶして、筒状に焼き固める装置を開発したのはトロムソという広島県の中小企業だ。

トロムソは燃料代に苦しむビニールハウス農家などからの需要を期待しているが、今のところ反応は鈍い。装置の値段も要因だが、最大のネックは「農家もJAも前例主義にとらわれて新しいことに挑戦する意識が低い」と同社で開発責任者を務める浅尾卓司氏は指摘する。

* * *

世界恐慌の足音も取り沙汰される中で、身を潜めて危機を回避しようとしている企業も見受けられる。ただ、いつの時代もイノベーション(革新)を生み出すのは、リスクを取って挑戦した者だけだ。嵐が過ぎ去るのを待つだけでは、目の前に迫った恐慌を突破することはできない。

もみ殻燃料に未来を託す外山建設の鈴木志宏社長(右から2人目)

